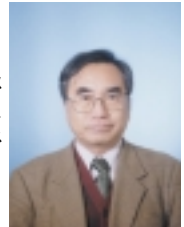


1. センター長挨拶

奈良女子大学共生科学研究センターは、平成13年4月に奈良女子大学初の省令施設として設置された。理念と目標は「新しい科学としての“共生科学”の創成とそれによる自然の保全と再生」である。現在、具体的な活動として、本学大学院E棟屋上で測定した有害紫外線のデータベース作成と全国ネットワークへの参加、衛星を用いたリモートセンシングによる紀伊半島におけるエネルギー収支及び植生研究、地球温暖化ガスの東吉野村における測定、佐保川、大和川を中心とした水質調査と環境ホルモンの魚類に及ぼす影響などについて研究を進めている。これらは、モンゴル、ブータン、ベトナムなどとの国際比較研究に発展しつつあるところである。また、奈良県、奈良市、東吉野村など地域の市町村との連携による自然の保全と再生のための活動を行っている。さらに、錯体を用いた循環可能な物質変換システムや人工光合成に関する研究も行っている。



設置に至るまでの過程において、紀伊半島シンポジウムを5年間継続し、紀伊半島を中心とした自然と生物の研究を紹介してきた。同時に理学部、生活環境学部、文学部などの研究者が協力して、自然科学のみでなく、社会学的な研究を行なっている研究者との連携を進めることにより、リサイクル、ゴミ処理問題などを含めて議論を行ってきた。これらのことは、平成11年の「自然環境及び物質循環の視点から見た共生循環型地域社会の研究 - ローカルからグローバルへ - 」としてまとめられている。奈良女子大学大学院人間文化研究科学術研究交流センター活動年報においても、平成11年の創刊以来現在まで毎回、共生科学に関連したシンポジウム、フォーラムの開催状況が報告されている。さらに関連した研究活動として、人間文化研究科人間環境科学専攻へ配分された平成12 - 13年度教育研究拠点形成支援経費による研究「生物共生循環系への人工化学物質による攪乱機構の解明」がある。このような経緯で共生科学研究センターは設置されたが、文部科学省からは、センターへの研究経費は措置されず、学内において措置せよということであった。学内の重点配分経費（プロジェクト経費）により、センターの立ち上げ、データベース作成などに加え、東吉野村分室や山頂に一部の観測装置の設置や衛星データの取得などの研究活動が可能となった。平成13年度における共生科学研究センターの活動は、「平成13年度奈良女子大学共生科学研究センター活動報告書」としてまとめられている。学長から「共生という言葉が市民権を獲得しつつある昨今、共生科学研究センターには是非頑張ってください」と激励を頂いております。さらに学内外の皆様からの御支援を頂きながら、センター員一同これからも頑張っていく所存であります。

2. 学長からのメッセージ ~学長へのインタビューを通じて~

日時：平成14年10月31日午前11時05分から午後0時20分まで
場所：学長室
インタビュアー：村松、三方

まず最初に、ニュースレター発行の趣旨について一通り説明したあと、学長から以下のようなメッセージを頂きました。

本学での共生科学研究センター設置と同時期に、文部省大学共同利用機関である総合地球環境学研究所が京都に設立されました。学長はその機関の評議員もされており、共生科学研究の推進のため、是非ともこの機関と強力な連携関係を築きたいとの思いをまず最初に語られました。また共生科学研究センターは10年間の時限付きで設置されており、第1期（3年、3年、4年）の各節目で審査・評価され、その後の予算配分などが査定されることになっていることから、できるだけ早く優れた研究成果をあげ、先端的な研究の成果を公表し、その後のセンターの研究環境を整えるステップとしてもらいたいとのことでした。



さらに第1期の中間報告の時期は、国立大学の独立法人化と重なっており、特に若い研究者を中心とした活発な研究活動なくしてはセンターの将来は語れないとの激励のお言葉を頂きました。

本学唯一の省令研究センターである共生科学研究センターの研究構想は、ヒトと自然との関係を中心に、文系・理系の境界なく地球環境をとらえていこうということですので、今後文科系の教官のより積極的な参加を通じて、文理の隔たりのない総合的な研究・学問を推進していく必要があると学長は感じられているようです。すなわちセンター内においては、学部や既存の学問分野の壁を取り払い、兼任教官・協力教官をより充実させて、共生科学に関する研究プロジェクトを強力に推進することが重要であると考えられています。そのためにも、共生科学研究センターで現在策定中の中期目標・中期計画において、具体的で、計画達成度が高く、しかも社会的要請の大きな目標・計画を掲げること - 具体的でインパクトのある目標設定 - が必要であるとインタビューの最後に述べられました。

インタビューの途中、現在人間文化研究科において計画中のCOEメンバーへの共生科学研究センター構成員、特に若い人たちの参入を期待しているとおっしゃられるなど、学長のセンターへの熱い期待がひしひしと伝わってきました。あっという間に過ぎた1時間15分でした。（インタビュアー）

~ TOPICS ~

1. センター長挨拶
2. 学長からのメッセージ ~学長へのインタビューを通じて~
3. センターメンバー紹介
4. スタッフ紹介 第1回「国際・研究協力室 専門職員 中窪利周さん」
5. センター施設紹介 第1回「大学院E棟4階E465・466」
6. 設立記念シンポジウム
7. センターの活動状況
8. センターからのお知らせ

3. センターのメンバー紹介

【グループ1】

- 大石 正 (oishi@cc.nara-wu.ac.jp)
河川における水生生物と環境との関係について、個体および集団レベルの、生理学的、生態生理学的な研究
- 古川 昭雄 (afkawa@cc.nara-wu.ac.jp)
生態系攪乱要因としてのつる植物を用いた高等植物の環境適応性に関する研究、東吉野における冷温帯林による二酸化炭素吸収量の定量的解析
- 村松 加奈子 (muramatu@ics.nara-wu.ac.jp)
衛星データを用いた陸域の熱エネルギー収支の研究及び、自然変動の研究
- 阿部 百合子 (yabe@cc.nara-wu.ac.jp)
生体内モデル錯体を含む多核マンガンおよびバナジウム錯体の合成とその反応性、人工光合成系の開発
- 高田 将志 (takada@cc.nara-wu.ac.jp)
空中写真や衛星画像を用いた、奈良地域や紀伊半島における自然環境の変遷の解明
- 磯辺 ゆう (yu@cc.nara-wu.ac.jp)
水中昆虫類と藻類の生態学的研究、それらの生物間の相互関係、生物と環境との関係についての研究

【グループ2】

- 大石 正 (oishi@cc.nara-wu.ac.jp)
魚類に対する内分泌攪乱化学物質の作用機構および影響評価
- 矢野 重信 (yano@cc.nara-wu.ac.jp)
グリーンケミストリーへの貢献をめざした、「高機能性有機無機複合体の開発」研究
- 三方 裕司 (mikata@cc.nara-wu.ac.jp)
錯体化学を基盤とした環境調和型分子変換プロセスの開発
- 高村 仁知 (takamura@cc.nara-wu.ac.jp)
食品の安全性についての種々の分析的研究、河川水質の汚染評価法に関する研究
- 佐々 尚美 (n.sassa@cc.nara-wu.ac.jp)
住宅の温熱環境に関する研究、環境と共生した住まいや住まい方などに関する研究

【関連プロジェクト】

- 「生物共生循環系への人工化学物質による攪乱機構の解明」
- 成瀬 真弓 (naruse@cc.nara-wu.ac.jp)
奈良県下の河川から採集された淡水魚数種における、内分泌攪乱化学物質（環境ホルモン）を視野に入れた水質の影響

【国際・研究協力室】

- 中窪 利周 (nakakubo@cc.nara-wu.ac.jp)

4. スタッフ紹介

思いつくままに（国際・研究協力室 専門職員 中窪 利周）

記念すべきセンターニュース第1号からの原稿依頼、それもスタッフ紹介のトップとは。さて、何を書いたものやらと思いながら締切り日になってしまいました。

ご存知のように事務職員の所掌する仕事は規則に規定されているため自由に選ぶことができません。センターの設置に伴い、事務分掌規則に「共生科学研究センターに関すること。」が加わったことにより、今この原稿を書いているわけです。センターの仕事をしたい！と手を挙げたのではなく、センターのほうからやって来たわけで、今日まで1年半お付き合いしています。また、人事異動のある事務職員にとって、最初にセンターの事務を担当することになったのも巡り合わせ、縁があったからでしょう。

とにかく、初代というのは不安もありますが、心地よいものです。前回の書類をなぞるだけの事務処理を好まない自分にとって、センターの事務は新鮮で、知らないこと、わからないことを利点として自分なりに処理方法を考えることができました。参考とする書類が無いため自分の処理が前例となるわけで、その面白さと責任を感じながら事務を執っています。今年は昨年の自分を参考にしていますが、その処理の可否は後任者が判断してくれるでしょう。

そんな僕に、立ち上がったばかりのセンターの事務を任せることになってしまったセンター長はじめセンターの皆様方にはご迷惑をかけたかもしれません。

しかし、自分なりにセンターのことを好きになり、大切に生きてきたつもりです。事務サイドからセンターを部局として認知させること、厳しい財政状況の中での運営費の捻出、設立記念シンポジウムの開催等々、センター専任の事務担当ではないため十分な対応ができなかったかもしれませんが、センターの一員となり走り回った1年半でした。学内外からセンターへ成果を求められるのは当然ですし、実績を重ね、研究拠点となる必要があります。そうやって欲しいと願いながらサポートしますので引き続きよろしくお願いします。

最後に一言。奈良女子大学の皆さん「共生科学研究センター」を上手く（深い意味を込めて）ご利用ください。



5. センターの施設紹介

今回と次回の2回にわたり、共生科学研究センターの施設を紹介したいと思います。今回は大学院E棟4階（E456・466）にある施設・機器の紹介です。

（1）川合文庫

カワゲラ目の分類をはじめとする水生昆虫類の生物学に関する研究を長く続けられ、日本の水生昆虫学の発展に尽くされてこられた奈良女子大学名誉教授川合禎次博士より、奈良女子大学に共生科学研究センターが設立されたのを記念して、水生昆虫学を中心とした文献を当センターに寄贈して頂きました。特にカワゲラ目を中心とした水生昆虫類分類学関連の文献類は古いものから集められており、貴重なものが多くあります。センターでは「川合文庫」として保管すると同時に、奈良女子大学図書館への登録を行いました。



川合文庫 書庫

（2）ワークステーション（SUN Ultra10 Model 440）

共生科学研究センターにおけるプロジェクトでは様々な研究が行われ、日々そのデータが蓄積されています。これに伴い、得られたデータを確実に保存し、また有効に利用するためのシステムの導入が必要になります。得られたデータを整理して管理・保存でき、また必要な時に必要な形で検索・参照ができるようなシステムの構築を目指して、オペレーションシステムにSolaris 8を搭載したUNIXマシンにデータベースマネジメントシステムとしてPostgreSQLを採用し、プログラミング言語にPHPを用いてデータの管理・運用を行っています。



ワークステーション（SUN Ultra10 Model 440）

6. 設立記念シンポジウム

共生科学研究センター設立記念シンポジウムが、2001年11月17日（土）、午前10時30分より午後17時00分まで、奈良女子大学講堂にて開催されました。参加者数は一般49名、学内44名、学生147名の合計240名でした。講演のタイトルと講演者は以下の通りです。

『いわゆる地球環境問題と共生』

総合地球環境学研究所所長 日高 敏隆 先生

『Severe impacts of herbicides on mangroves in Vietnam war and ecological effects of restoration』

ベトナム国立大学ハノイ校 マングローブ研究所所長
Phan Nguyen Hong 先生

『宇宙からの陸域観測』

共生科学研究センター助教授 村松 加奈子 先生

『Processing of remote sensing images for environmental change analysis』

中国・武漢大学教授 張 良培 先生

『農作物を加害する野生鳥獣対策』

奈良県果樹振興センター総括研究員 井上 雅央 先生

『Sustainability science and the economy of the future』

米国・カーネギーメロン大学教授 Terry Collins 先生

『Activation of hydrogen peroxide for bleaching applications in the pulp and paper industry: Green chemistry in action』

ニュージーランド・オークランド大学教授
James Wright 先生

最後に講演者全員が壇上上がり、共生科学研究センター高村仁知先生の司会により、会場からの質問に答える形で総合討論が活発に展開されました。



学長挨拶



センター長挨拶



総合討論

7. センターの活動状況

- 平成13年 4月1日 奈良女子大学共同利用の省令施設として設置された。
東吉野村にセンター分室の設置
- 平成13年7月27日 講演会の開催
「Melatonin and Radioprotection」
Prof. Vijayalaxmi (University of Texas)
- 平成13年8月31日 奈良県生活環境部との情報交換会の開催
- 平成13年11月17日 設立記念シンポジウム
奈良女子大学講堂にて開催
一般 49名、学内 44名、学生147名の方に参加いただいた。
- 平成13年11月23日 ~ 25日 オリンピック記念財団主催「子どもゆめ基金」による
奈良県下の高校生、中学生を対象とした科学技術体験実習
「地球環境にとっての森林の役割って何だろう」の開催
奈良女子大学共生科学研究センター分室（東吉野村）にて
- 平成13年11月30日 化学セミナー 開催
「Biocalization and Speciation of Insulin-Enhancing Vanadium Compounds」
Prof. C. Orvig (University of British Columbia)
Prof. D. C. Crans (Colorado State University)
- 平成14年3月9日 ~ 10日 関西淡水動物談話会の開催と野外調査
「ムナグロナガレトビケラ種群、スリムなナガヒレトビケラの微生息場所特性」
平 祥和氏（大阪府立大）
「環境評価と野外調査のあり方」
三橋弘宗氏（兵庫県立人と自然の博物館）
- 平成14年3月18日 平成13年度有害紫外線モニタリングネットワーク担当者会議の開催
- 平成14年8月26日 ~ 28日 オリンピック記念財団主催「子どもゆめ基金」による
奈良県下の高校生、中学生を対象とした科学技術体験実習
「森林を探索して生き物の不思議を知ろう」の開催
奈良女子大学共生科学研究センター分室（東吉野村）にて

8. センターからのお知らせ

編集後記

第6回 紀伊半島シンポジウム
「紀伊半島の森林と水」
会場：奈良女子大学記念館
日時：平成14年12月21日（土）13時～17時
主催：紀伊半島研究会
共催：奈良女子大学共生科学研究センター
入場無料

プログラム

1. 大台が原の森林はどのように荒廃して来たのか
～大台・大峰の森林荒廃の現状～：横田岳人
(奈良女子大学)
2. 東吉野の森林と林業：竹内信市 (竹之内林業)
3. バイオマスの有効利用：井戸直樹
(関西産業株式会社)
4. 紀伊半島の河川と水生昆虫：磯辺ゆう
(奈良女子大学)
5. 高見川の魚類とその保全：榎本實雄
(東吉野村漁業協同組合)

第2回 共生科学研究センターシンポジウム
「地球共生系と森林の持続的保全」
会期：平成15年1月24日（金）～25日（土）
場所：奈良女子大学記念館
主催：共生科学研究センター
共催：独立行政法人国立環境研究所
入場無料

KSC（共生科学研究センター）ニュースレターの第一号
はいかがでしたでしょうか？共生科学研究センターではセ
ンターの活動状況を広く知っていただくために、毎年セン
ター紹介用のパンフレットを作成しております。

このセンターニュースでは、パンフレット等では紹介し
にくい速報的な内容や、メンバーの生の声を順次お伝え
していきたいと思っております。今後、年2回を目標に発行して
いく予定です。御愛読の程よろしく申し上げます。

ニュースレターに関してご意見等ございましたら、各学
部のセンターのメンバーあるいは、編集委員まで御連絡下
さい。

また、この場を借りまして、非常に御多忙な中インタビ
ューに御協力くださいました丹羽雅子学長に御礼申し上げ
ます。（村松）

制作発行 奈良女子大学共生科学研究センター
編集者 村松 加奈子 三方 裕司
佐々 尚美
連絡先 ☎630-8506 奈良市北魚屋西町
Tel 0742-20-3687
センター本部 E465室・466室（大学院E棟3階）
<http://www.nara-wu.ac.jp/kyousei/index.html>
e-mail: kyousei@cc.nara-wu.ac.jp